

## 人生における「悲哀」と「あり得たはずの未来」

中川優一\*

### 1 はじめに

人生は長い。それゆえに喜びもあれば悲しみもある。しかし、時に悲しみという言葉では済ますことが出来ないような悲劇が訪れることもあるだろう。そんなとき、私たちはどう自らの人生と向き合えば良いのだろうか。これは途方もない問いであり、残念ながら本論文で答えを提示することはできない。代わりに本論文が目指すのはそうした悲劇が私たちを襲ったとき、私たちが一体何に苦しんでいるのかを明らかにすることである。そして、そうした状況から再び歩み始めるための一歩を踏み出す方向を示すことである。

### 2 「破断」という人生における悲劇的な出来事

人生には数え切れないほど無数の悲劇が存在している。身近なものでは大切な人の死や、大きなものでは戦争や飢饉などが挙げられるだろう。こうした中でも、本論文ではある人生に降り掛かる悲劇の問題を考えていくことにしたい。

森岡正博は2016年論文にて、ある人生に降り掛かる悲劇を「破断」と捉えて興味深い議論を行っている。森岡によれば「破断」とは「虐待や繰り返される暴力などのような、自分にとって過酷な出来事が起きたときに、自分の人生がその時点で暴力的に断ち切られたような状態になり、未来へと前向きに生きていこうとする力が奪われてしまうことである」<sup>1</sup>。このような「破断」に伴って、森岡は三つの要素を導入することで乗り越えるための道筋を示そうとしている。一つ目は「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実であり、次に「破断」それ自体、最後に「破断」を導いた出来事が挙げられる<sup>2</sup>。そして仮に肯定が行われるのならば、今挙げた順に肯定の輪が広がっていくという。つまり「破断」を乗り越えるためにまず目指されるのは「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実を肯定することである。

では「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実はどのよう

---

\* 東京大学大学院総合文化研究科修士課程

電子メール：<https://yuichinakagawa.wixsite.com/meaning-in-life> の送信フォームより

<sup>1</sup> 森岡(2016), p.16.

<sup>2</sup> Ibid., pp.15-18.

に肯定されるのだろうか。この事実の肯定は一見簡単そうに見えて、複雑な問題が背後に潜んでいるように思われる。少なくとも私たちは「破断」の定義を正確に追わなくてはならないし、ここまで生き抜いてきたという事実を肯定する主体がいつこの地点からこの肯定を行うのかを示さなくてはならないだろう。そうして初めて肯定される事実の始まりと終わりが規定されることになる。

## 2-1 森岡正博における「破断」

定義を確認する限り、森岡が扱う「破断」は外在的な要因によってもたらされるものである。つまり虐待や繰り返される暴力などといった出来事自体が「破断」なのではなく、そうした出来事とは別に「破断」が位置付けられている。この点は先に見た三つの要素からも読み取ることが出来るだろう。直感的にみれば悲惨な出来事自体を破断と呼んでも良さそうだが、こうした出来事は「破断」を導いた出来事として切り出されている。これらを区別することについて森岡の議論をもう少し読み進めてみよう。少し長くなるが、重要な箇所であるため正確に引用する。

「破断」を導いた出来事と「破断」を区別することによって、さらに以下のことが言えるようになる。「破断」を導いた出来事は私の外部で起きた事象にすぎない。その出来事が私の人生へと食い込んで来て「破断」をもたらすのである。「破断」を導いた出来事が私の人生において起きたのは確かだとしても、それはあくまで外側から私の人生へと介入してきたのであり、これに対して「破断」は、外部からの介入に対抗する形で私の人生の内側から生成されたものである。「破断」は、最初から私の人生の一部であり、私の「人生の肉」なのである。これに対して、「破断」を導いた出来事は私の「人生の肉」ではない。それは私の「人生の肉」と外部世界との接点において起きた事象でしかない<sup>3</sup>。

以上から、少なくとも森岡は先に私が述べたような意味での破断を(1)外部＝「破断」を導いた出来事、そして(2)内部＝「破断」、という二側面へ分岐させることで後者を内在的な問題として肯定する余地を切り開こうとしていると言えるだろう。しかし、この区分に伴って様々な問題が生起しているように思われる。第一に「破断」がもたらされるものであり、かつ私の内側から生成され、かつ最初から私の一部であるということの内実を明晰に掴むことができない。第二に、仮に私の内側からこの「破断」が生成されたとして、内側に「破断」を抱

---

<sup>3</sup> Ibid., p.17.

えたまま「破断」をくぐり抜けることはできない。それゆえに「破断」をくぐり抜けてこれまで生き抜いてきたという事実を最初に肯定することができない。第三に、「破断」を導いた出来事が私の外部で起きたことであつたとして、その破片が食い込んだままの状態ですべてこれまで生き抜いてきたという事実を肯定することが出来るのか定かではない。

以上三点の問題を鑑みると、「破断」をくぐり抜けて生き抜いてきたという事実ではなく、やはり「破断」から肯定されるべきであり、ひいては「破断」を導いた出来事から、ということになりそうである。しかし、一口に「破断」を肯定するといっても一体何が肯定されることになるのか明らかにならないままでは肯定することもできない。改めて考えていくことにしよう。

## 2-2 もたらされ、かつ内側から生成され、かつ私の一部である「破断」

本節で扱うのは第一の問いである。外在的な出来事によつてもたらされ、かつ私の内側から生成され、かつ最初から私の一部である「破断」は一体どのような概念として理解すれば良いのだろうか。はじめに森岡の力点がどこに置かれているのかを確認しよう。先に引用した後半部分を鑑みるに、森岡は悲劇的な出来事を襲来者のようなイメージで捉えることでその外敵に対抗する私たちの努力を「破断」と呼ぼうとしているように思われる。この側面を私の防衛と呼ぶことにしよう<sup>4</sup>。一方で「破断」は最初から私の人生の一部であるとも言われている。もたらされ、かつ内側から生成され、かつ最初から私の人生の一部であるような「破断」。漠然としたこの概念の内実を掴むためにはそれぞれ個別の記述が必要となるだろう。

- (a) 「破断」とは悲劇的な出来事によつてもたらされる私の防衛である。
- (b) 「破断」とは悲劇的な出来事に対抗して生成される私の防衛である。
- (c) 「破断」とは悲劇的な出来事によつて目覚め立ちあがる私の防衛である。

一つずつ確認しよう。21頁で引用した森岡による「破断」の定義と波長が合うのは(a)である。悲劇的な出来事によつて人生が断ち切れ、未来へ前を向いて生きていく力を奪われることが「破断」となるからである。一方で私の防衛であるということは理解できなくなってしまう。悲劇的な出来事によつてもたらされた傷を「破断」と形容するだけでは森岡が行おうとした分離は意味をなさなくなってしまうだろう。

---

<sup>4</sup> この読みが誤りである可能性も否定できない。しかし、議論を進めるため暫定的に私の防衛と置くことにしたい。

次に(b)は最も読みの印象に近い記述である。このように「破断」を定義すれば、森岡が行った分離を正確に反映することが出来る。一方で、このようなものとして「破断」を捉えた場合、21頁で引用した森岡による「破断」の定義と矛盾してしまうように思われる。私が自ら人生を断ち切り、未来へ前を向いて生きていく力を奪うわけではないからである。

では最後の(c)はどうだろうか。新しく生み出されるのでもなく、もたらされるのでもない、私たちが最初から持ち合わせているある種の対抗力として提示される「破断」である。この定義が示したい内容はおそらく「破断」の領域を超え、森岡が長く研究を続けてきた誕生肯定に深く関わっているように思われる<sup>5</sup>。いわば、私たちの生命に伴う根源的な肯定ともいうべき力である<sup>6</sup>。

以上三つの区分を確認したことで森岡が「破断」という概念を用いて指摘したい内容が少しずつ見えてきたように思われる。しかし、正確に定義を行うためにはそうした「破断」がどこに位置づくのか、また今現在の私とどのような関係にあるのかを明らかにしなくてはならない。

### 3 「破断」と今現在の私

すでに確認したように森岡が提起した「破断」は様々な側面を含むものであった。したがってこれ以下、今現在の私との関係から「破断」を考えなおすことで細かい定義の変更を目指すことにしたい。この時手がかりとなるのは第二の問題、すなわち「破断」を内側に抱えたまま「破断」をくぐり抜けてこれまで生き抜いてきたという事実を肯定することはできないという問題である。

以上の指摘はここまで生き抜いてきたという事実を肯定する存在が今現在に位置しているという仮定が前提となっているが、2016年論文を参照する限り、森岡もこの前提に立っていると思われる<sup>7</sup>。これを本論文では今現在モデルと呼ぶことにしよう。

では、具体例を用いて今現在モデルから「破断」を見つめ直してみよう。戦争を例として考えてみたい。少なくとも私たちは「破断」を導いた出来事に戦争を置くことが出来る。したがって、この文脈における「破断」とは「戦争によってもたらされ、かつ内的な対抗として私の内から生成され、かつはじめから私の一部であったような、暴力的に断ち切られたような状態であり、未来へ前を向けて生きていく力が奪われてしまうこと」となる。「破断」の内実はさて

<sup>5</sup> 誕生肯定については森岡(2011)を参照。

<sup>6</sup> 根源的肯定 *affirmation originaire* というキーワードをJ.ナベールが提起しているようである。詳しくは杉村靖彦(2006)を参照。本論文ではこれ以上言及しないが、今後の重要な課題であることは間違いない。

<sup>7</sup> 森岡(2016)前半、及び森岡(2013b)第1章時間論、参照。

おき、この「破断」を抱えるのは一体誰かという今現在の私であるはずである。したがって「破断」を肯定する際には今現在まさしく「破断」を抱えている当の私が、その「破断」を抱えている当の私のあり方を今、肯定することになるだろう。では今現在「破断」を抱えている私がこの「破断」をくぐり抜けてこれまで生き抜いてきたという事実を先に肯定出来るのかと問われれば、できないだろうというのが第二の問題で指摘した事柄である。更に言えば今現在に立っている私が想起する過去の中身には「破断」を導いた戦争も含まれているはずであり、それゆえに戦争以降生き抜いてきたという事実の肯定はますます難しくなってしまうはずである<sup>8</sup>。

したがって森岡が「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実をまず肯定するという際には、今現在モデルに立ちつつも自分の過去を振り返って見通すような、すなわち淡々と起こった事柄を記述し、時系列順に並べていくような事象の連なりの次元を想定していると考えられる。この次元から私の人生を眺めた場合には当然過去のある点に「破断」、ないしは「破断」を導いた出来事が位置付けられることになるため、それ以降の人生の範囲は明確に規定出来る。しかし、そのような「破断」を想定した場合でも「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実を肯定する際には以下の状況に直面することになる。

1. 「破断」以降生き抜いてきたことは事実であり、今は苦しんでいない
2. 「破断」以降生き抜いてきたことは事実だが、今もなお苦しんでいる

まず両者に共通する問題として「破断」以降という記述がなされる時点で「破断」が今現在の私から切り離されているように見えるという点が挙げられる。つまり「破断」以降と表記した場合と戦争以降と表記した場合の違いがほとんどなくなってしまうのである。加えて、個別の問題も存在している。

1. の場合、今はもう苦しんでいないのだから「破断」以降生き抜いてきたという事実は問題なく肯定出来る。しかし今現在苦しんでいないのであれば、そもそもここまで生き抜いてきたという事実から肯定する必要がないように思われる。つまりどこかの段階ですでに「破断」ないし「破断」を導いた出来事が肯定/忘却されているはずなのである<sup>9</sup>。

転じて 2. は確かに「破断」以降生き抜いてきた事実を認めるが、「何か」に今も苦しんでいる場合である。森岡がここまで生きてきたという事実が肯定さ

---

<sup>8</sup> Survivor guilt を想像すればわかりやすいだろう。生き抜いてきたではなくて、生きてきてしまったという変換が肯定の前になされてしまうのである。

<sup>9</sup> 完全に肯定する/忘却することが出来るかどうかはわからない。この点は小松原(2014)が赦しという観点から興味深い議論を行っている。

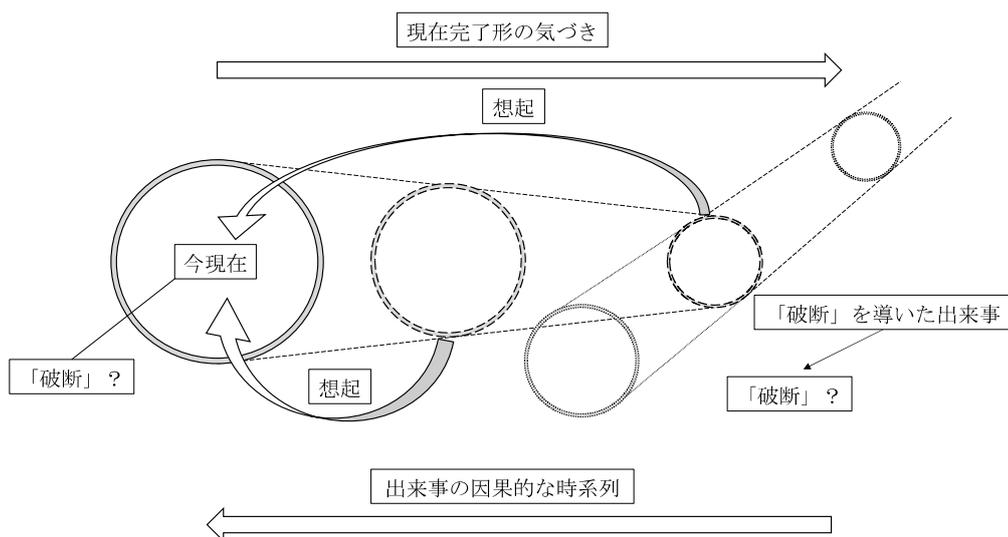
れた後の状態として想定しているのはおそらくこの場合であると考えられる。そして、今なおも苦しんでいるということと、事実としてここまで生き抜いてきたことは分けて想定出来るというのが森岡の主張ということになるだろう。したがって、後半の苦しみについては次に肯定される「破断」の問題であるということになるはずである。しかし、このように書くと先に「何か」と述べた部分にも「破断」が入ることになり、何やら不思議な状態となってしまう。そこで戦争という例を踏まえて書き換えれば次のようになるはずである。

2a. 戦争以降生き抜いてきたことは事実だが、今も「破断」に苦しんでいる

以上のように書き換えることで「破断」が位置づく場所は明らかとなる。しかし未だに「破断」の全貌を捉えられているとは思われない。そこで森岡の「破断」概念を図式化して問題の所在を考えていくことにしよう。

#### 4 「破断」は人生のどこに位置づいているのか

ここまで議論を進めてきたことで「破断」の所在は今現在に近づきつつあるように思われる。一方で森岡の定義による「破断」はその所在を明らかに示しているわけではない。ならば、森岡の示す「破断」はどこに位置付き、どのような概念として提起されているのだろうか。今現在私たちが直面している問題を図表にすると以下のようなになる。



実際には動的な今現在という概念を静的なモデルに押し込めているため完全なものが描けているとは思われない。しかし、私たちがどのような観点から森岡の「破断」概念を捉えようとしているのかを示すことは出来るはずである。

まず一番左に位置しているのが今現在であり、私たちは常にこの場所に生きていると言える。したがって、かつては「破断」を導いた出来事が起こった場も今現在であったし、他の円についても同様である<sup>10</sup>。なお、このモデル上では今現在という場において現在完了形の気づき<sup>11</sup>という形で過去が想起されることになる。もちろん今現在から振り返って想起しなおすわけだから、都合の悪い記憶を忘却し、よかった記憶だけを保持することも出来るだろう。しかし「破断」はそう簡単に忘却出来ないからこそ「破断」なのであり、それゆえに「破断」は今現在にも立ち現れることになるはずである。これが本論文で指摘した第二、第三の問題である<sup>12</sup>。

次に出来事の因果的な時系列という観点から見ていくと、右から順に起こった出来事が記述されていくわけだから、「破断」及び「破断」を導いた出来事以降の時間を明確に区別することが出来る。しかし、「破断」を過去の点に置いた場合、「破断」を導いた出来事との区別や「破断」の位置付けがわからなくなるという点が前節で問題となっていたのであった。それではこれまでの問題と図表を絡めつつ思考を進めていこう。

この図表上では今現在と「破断」を導いた出来事それぞれに「破断」が接続されている。これはこれまでの議論から「破断」を導いた出来事に対して生成される「破断」と、今現在「何か」として保持される「破断」、両面の可能性を反映したものである。では改めて問うことにしよう。「破断」は私たちの人生の一体どこに位置づくのだろうか。

これまで何度も確認してきたように、森岡は「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実からまず肯定されるとする。ならば、この肯定が成立した後に「破断」が肯定されるのであるから、先にも確認したようにくぐり抜けられる「破断」は実質「破断」を導いた出来事として解釈される必要があったのだった。

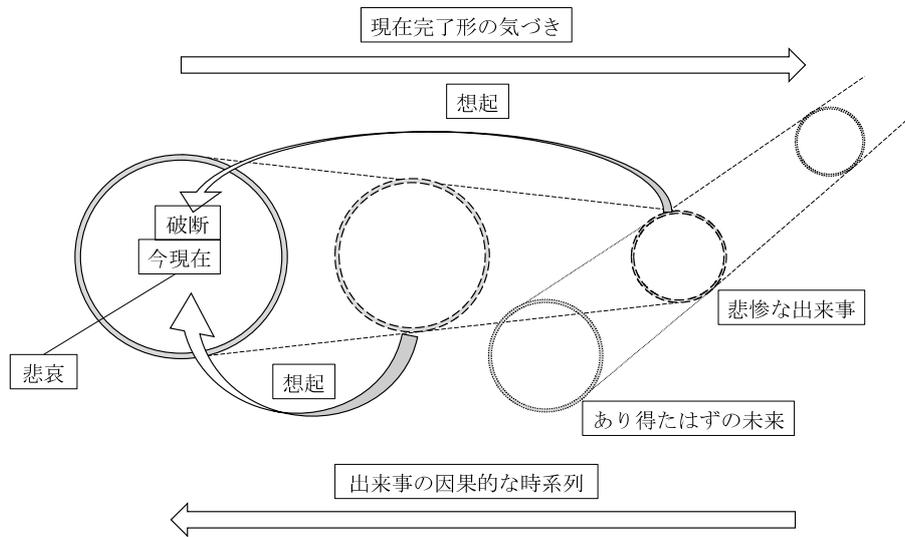
次に「破断」の肯定がこれまで生き抜いてきたという事実の肯定の後になされるということは、これまで生き抜いてきたという事実を肯定する段階ではなおも「破断」は保持されているはずなのであった。以上を総合してそれぞれ配置替えを行うと、次のようなモデルが想定出来るのではないだろうか。

---

<sup>10</sup> 「破断」から分岐し、途中で止まっている円については後ほど説明を行う。

<sup>11</sup> 森岡(2016), p.14.

<sup>12</sup> 第二の問題と第三の問題の違いは、ここで「破断」としているものをそのまま「破断」とした場合と、「破断」を導いた出来事と置き換えた場合の違いとして説明される。



変更がなされたのは「破断」が今現在に置かれている点、そして「破断」を導いた出来事ではなく悲惨な出来事へと変更されている点、最後に今現在の私の苦しみを総称する「悲哀<sup>13</sup>」と、その対になる「あり得たはずの未来」という概念を新しく追加した点である。

この変更に伴って修正された定義について確認していこう。まず「破断」を導いた出来事は因果的な時系列において発生した悲惨な出来事として読み替えられた。それに伴って「破断」は今現在の私が過去に起こった悲惨な出来事を想起したときに、今現在という場において立ち現れる概念とした。内容は21頁で引用した森岡による「破断」の定義をベースにして次のように書き換えられる。「破断」とは「自分にとって過酷だった出来事を今現在改めて想起したとき、自分の人生がその過去の時点で暴力的に断ち切られていたかのような感覚になり、未来へと前向きに生きていこうとする力が失われてしまうこと」である。

このように変更することで「破断」を抱えたまま「破断」以降生き抜いてきたという事実を肯定するという矛盾は時系列上では解消されたと言える。しかし、余地が確保されたからといって、悲惨な出来事をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実を「破断」を持ちながら肯定出来るかどうかはまた別の問題である。

森岡の「破断」に含まれていた三つの要素についても確認しておこう。念のため確認しておく、三つの要素とは1.もたらされ、かつ2.生成され、かつ3.最初から私の内部であるというものである。

<sup>13</sup> 西田幾多郎による悲哀を詳しく扱うことはできなかった。西田は自己論の観点から存在に伴う悲哀を論じており、筆者の関心とも近い。今後の課題としたい。詳しくは榎本(2002)参照。

1.と2.の側面は重ねて扱われている。「破断」を今現在の私によって想起されるものとしたことで1.のもたらされるという側面は削除されることになった。実際に悲惨な出来事が起こったとき、必ずしも経験した全ての人間が「破断」をもつわけではないことからこの側面は削除されるべきだと考えられる<sup>14</sup>。そして先にも述べたように「破断」は今現在の私によって想起される、つまり2.生成されるものとして回収されている。しかし、積極的に生成しているわけではないため、想起する/立ち現れるという表現となっている。しかし本来生成されるのは私の防衛であるはずだから、このような修正も認められるはずである。そこで最後の問題は3.最初から私の内部であるという側面ということになる。

この側面については先述したように私たちの生命に伴う根源的な肯定ともいふべき力と関連づいているように思われるのだった。生成の問題が前面に出てくるのもこの側面においてだと思われる。また、森岡の「破断」に見出された悲惨な出来事に対抗する内的な努力を私の防衛と置くのが正確な読みかはわからないとした理由もこの点に結びついているのであった。おそらくこの点は森岡も未だ明らかにしていない重要な論点であり、本論文でこの点を全て回収するのは手に余る課題である。しかし、新しく導入した「悲哀」及び「あり得たはずの未来」という概念と合わせて一応の見通しを論じていくことにしたい。

## 5 「悲哀」と「あり得たはずの未来」

ここまでの議論から私たちの問題はかなり絞られてきたものと思われる。まず森岡が提起した「破断」概念を整理したことで時系列の観点からは矛盾なく悲惨な出来事をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実を肯定する余地が確保された。一方で悲惨な出来事を今現在ありありと想起し、「破断」を抱いていながら、悲惨な出来事で降生き抜いてきたという事実を肯定出来るのかという問いが依然として残されてしまうのであった。

この問いに対する究極の応答となりうるのは前節で確認した私の防衛の観点であろう。すでに述べたように、残念ながら本論文では直接の回答を提出することは出来ない。しかし、少なくともなぜ「破断」を抱えながらこれまで生きてきたという事実を肯定することが難しいのかを描き出すことは出来るはずである。そして、難しさの理解に伴って、私たちが歩みを向けるべき方角もぼんやりとではあるが見えてくることになるだろう。この手がかりとなるのは新しく導入された「悲哀」及び「あり得たはずの未来」という概念である。

「悲哀」の説明から始めよう。この概念は今現在の私が「あり得たはずの未来」を伴って想起する苦しみの総称と位置付けられている。このように概念を

---

<sup>14</sup> 「破断」を導いた出来事が私の外部にあるという状況もここに保存されているはずである。

拡張したのは同型問題である「生まれてこなければよかった<sup>15)</sup>」という反出生主義的言明なども共に含めて考えていくためである<sup>16)</sup>。肝要なのは、私の人生を大きく変えてしまったように思われる出来事に対して抱く苦しみが「悲哀」と呼ばれることである。より正確に言えば「あり得たはずの未来」を伴って想起される苦しみだけがこの「悲哀」に分類されることになる<sup>17)</sup>。

では「あり得たはずの未来」と「破断」はどのような関係にあるのだろうか。これまで何度も確認してきたように「破断」とは、自分にとって過酷だった出来事を今現在改めて想起したとき、自分の人生がその過去の時点で暴力的に断ち切られていたかのような感覚になり、未来へと前向きに生きていこうとする力が失われてしまうことである。しかし、厳密に言えば今現在想起してそう感じられるわけだから、悲惨な出来事によって実際に自分の人生が断ち切られてしまったわけではないのである<sup>18)</sup>。森岡がいう「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実はこのような意味合いで言われているはずである。一方で、何か断ち切られてしまったかのように思われることもまた事実であろう。では一体何が断ち切られてしまったのかといえば、その出来事が起こらなければ私が経験したであろう未来、つまり「あり得たはずの未来」が断ち切られてしまったのである。したがって「破断」の苦しみである「悲哀」は「あの時あの出来事がなければ私は今〇〇であれたのに」という「あり得たはずの未来」に対する想起と共に到来することになる。

このようなものとして「悲哀」を捉えたとき、反出生主義的言明に対する苦しみも同様に「悲哀」として理解されることになる。なぜなら「あの時私が生まれていなければ私は今〇〇であれたのに」という要求を含んでいるからである<sup>19)</sup>。そして「悲哀」が乗り越えがたいものとして私たちの人生に到来するのは出来事自体がもたらす辛さに加えて、本当に起こり得たかどうかもわからない上に絶対に叶えることができない「あり得たはずの未来」を繰り返し想起してしまうことにあると考えられる。この「あり得たはずの未来」は人生の時間軸上どこにも存在していないにも関わらず、「破断」と共に想起を通して今現在に繰り返し現れることで私たちの未来に影を落としてしまうのである。では、私たちはどうやってこの「悲哀」と向き合っていけば良いのだろうか。これが本論文で扱う最後の問いである。

<sup>15)</sup> 森岡(2013a)。反出生主義の代表的な論者に D.ベネターがいる。詳しくは Benatar, D. (2006)。

<sup>16)</sup> 2018年8月、札幌にて反出生主義に関する発表を行った。詳細は筆者 HP[業績一覧]参照。

<sup>17)</sup> ちょっとした怪我やすぐ治る風邪など、こうした苦しみは「悲哀」のうちに含まれていない。

<sup>18)</sup> この意味で真の「破断」はとある出来事を原因として自ら命を奪ってしまうことであると言えるかもしれない。

<sup>19)</sup> 森岡(2013a)は反出生主義的言明について、別の在りようを求める別世界解釈とただ無に帰することを求める無化解釈、二つの読み筋があることを指摘している。後者は V.フランクルの実存的空虚とも繋がる問題である。

## 6 結びにかえて

「あり得たはずの未来」は強力である。私自身、今も振り払えないでいる。2015年8月31日。発症の前日まで共に何事もなく遊び、語り合った友人が髄膜炎菌性髄膜炎による四肢切断を苦として自ら命を絶った日である。伝え聞くところによると、彼は残された口で自ら生命維持装置を引き剥がしたようだ。

私があの時もう眠いと部屋を立ち去らなければ、発見が遅れ四肢切断に至ることはなかったのではないか。私がもっと髄膜炎菌性髄膜炎について詳しくれば、留学先のオーストラリアという地で、特に入寮した場合のリスクが高いということを知っていれば何かできたのではないか。あの時私が救えていれば、今頃笑い話にできていたのではないか。止めどない後悔と「あり得たはずの未来」は4年目になる今も私の人生を遮ろうとしている。この実体験こそ、私が本論文で「破断」をくぐり抜けてここまで生き抜いてきたという事実から先に肯定出来るのかどうか疑わしいと繰り返し述べてきた理由である。

そんな今現在の私が提案出来るのは「あり得たはずの未来」を繰り返し何度も受け止め続ける過程で徐々に「あり得なかった過去」として受け止めなおす方針である。過去に起こってしまった出来事をなかったことにすることはできない。したがって私が過去を振り返り自分の人生を想起するとき、出来事も「破断」も共に立ち現れることになるだろう。しかし「破断」の苦しみである「悲哀」は私が想起する「あり得たはずの未来」と共に到来するものである。ならば、この「あり得たはずの未来」を長い時間をかけて「あり得なかった過去」として受け止めることができたとき、「破断」を抱えながらも「悲哀」からは解き放たれうるのではないだろうか<sup>20</sup>。そして「悲哀」から解き放たれることで次第に出来事自体の辛さと向き合うことが出来るようになり、最終的に「破断」を私の人生の一部として受け止めていくことが出来るようになる可能性がある。

ではこのような営みを全て可能にするのは何かというと、私が今ここに生きているという事実である。つまり、今現在という場が生成され続けているという事実である。現在完了形で振り返られる人生ではなく、振り返ることも想像することもできない今現在という場それ自体に私が今立っているという、この溢れ出る生成の事実こそ本論文が私の防衛と位置付けたことの内実であり、私たちの肯定の基礎となりうるものなのではないだろうか。もちろんこの事実すらこれまでの議論に即せば肯定できないのかもしれない。一方で、私たちの道標はすぐ足元にあるかもしれないのである。

---

<sup>20</sup> 「あり得たはずの未来」から「あり得なかった過去」へと受け止め替えていくということは、もしかすると森岡がここまで生き抜いてきたという事実を肯定するというだけで言いたかったことと同型なのかもしれない。一方で、後述するようにこの営みが現在完了形ではなく、現在進行形で為されるという点は最も大きな違いである。

## 文献一覧

### 【日本語文献】

- 小松原織香 (2014) 「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」『現代生命哲学研究』第3号、pp.1-14。
- 杉村靖彦 (2006) 「ナベールの自我はいかに証しされるか：証言の解釈学に向かって」『宗教学研究室紀要』第3号、京都大学文学研究科宗教学専修、pp.2-17。
- 梶本修作 (2002) 「存在し生きることそのものが悲哀であるということ：西田哲学における自己論の考察」『臨床教育人間学』第4号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座、pp.31-51。
- 森岡正博 (2011) 「誕生肯定とは何か：生命の哲学の構築に向けて（3）」『人間科学：大阪府立大学紀要』第6号、pp.173-212。
- 森岡正博 (2013a) 「「生まれてこなければよかった」の意味：生命の哲学の構築に向けて（5）」『人間科学：大阪府立大学紀要』第8号、pp.87-105。
- 森岡正博 (2013b) 『まんが哲学入門』講談社現代新書。
- 森岡正博 (2016) 「「誕生肯定」と人生の「破断」を再考する：生命の哲学の構築に向けて（8）」『現代生命哲学研究』第5号、pp.13-27。

### 【外国語文献】

- Benatar, D. (2006) *Better Never to Have Been*, Oxford University Press.